附属函館中　探究成果発表

地域課題解決の方策は

西部地区活性化など柔軟な発想で

【函館発】道教育大学附属函館中学校（小林真二校長）2年生は3日、同校で総合的な学習の時間における探究活動の成果を発表した＝写真＝。函館市基本構想が示す施策に沿って、地域課題の解決に向けた方策などを考案。参観した活動協力者の一人は「今の自分たちにできることに目を向けて行動する発想が素晴らしい」と、生徒たちの視点や柔軟な発想をたたえた。

同校は総合的な学習の時間において、1年生から順に「まちの宝を知る」「まちの将来のために行動する」「自分の未来を探究する」をテーマに探究プロセスを展開している。

うち2年生は、市基本構想の「五つの基本目標」と「20の施策」を踏まえ、21グループに分かれて活動。それぞれが課題を洗い出し、調査活動やフィールドワークを通して得た気付きをもとに提言書をまとめている。

成果発表会には保護者や活動協力者らが来校。発表資料等はグーグル・サイトで共有され、来校者はスマートフォンなどで確認しながら発表を見て回った。

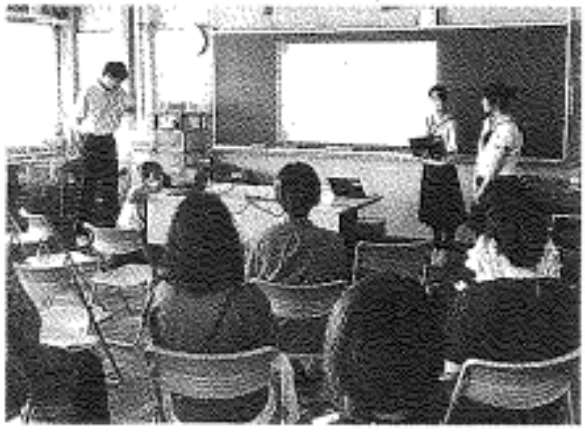
魅力ある景観や街並み、市街地の形成に当たって、観光スポットが点在する市内西部地区に着目したグループは、十字街の高齢化やにぎわいの一極化を課題に挙げた。「住民が十字街を多く利用する」「高齢者が住みやすくなる」状態を理想に掲げ、現状把握に努めた。

同校生徒を対象にしたアンケート調査からは、十字街の認知度や関心度などを分析。フィールドワークでは、十字街電停周辺にいる人の密集度等を調べたほか、市都市建設部まちづくり景観課への取材を通して市の取組を知り、周辺地域の活性化に必要な要素を洗い出した。

調査活動を終え、十字街周辺の環境美化活動を通して魅力を発見するボランティアイベントを企画。併せて、坂道が多い西部地区で高齢者の手助けをする「ウーバージュニア」の取組を考案した。

活動に協力した市都市建設部まちづくり景観課の小坂未希子主査は「地域活性化に向けて華やかな取組を思い浮かべてしまいがちだが、今の自分たちにできることに目を向けて行動する発想が素晴らしい」とたたえた。

この日、道教育大大学院教育学研究科の渋谷一典教授が参観。文部科学省勤務時に学習指導要領「総合的な学習の時間」の改訂を主導した渋谷教授は「中学校段階の探究学習が充実していると、他校種の探究学習も進展する」とし、生徒や学校の取組を評価した。

生徒たちは「探究活動や他グループの発表から地域の現状や課題を知り、解決方法を考えるきっかけになった」と振り返った。

今月中旬には、選出された3グループの提言書を市企画部計画調整課が受け取り、大泉潤函館市長のもとに届けられる。